

# 中国文物出版社 出版後の 雁塔聖教序における考察

荒 金 大 琳

はじめに

雁塔聖教序は太宗と皇太子李治（後の高宗）による撰文で、永徽四年（653）に褚遂良によって揮毫された。初唐は楷書が成熟し始めた時期であり、太宗が王羲之の書（特に蘭亭序）を愛したという背景の中で、雁塔聖教序には濃く行書の匂いがしている。つまり、この楷書の石碑にはいたるところに行書の筆画が確認される。

現在使用している拓本は宋拓で歴代伝わっている拓本の中でも一・二と言えるもの。原碑の研究を通じて、たくさんの方には顕れていない細かい部分を発見することができた。又、現在公表している写真は雁塔聖教序を全面的に深く理解するのに大きく役だつものと思つている。碑中の大量の修正線はこの碑の書がかつて修正されたことを伝えている。この修正線の事実から見て、この碑が建立されたときに何らかの正常でない状況であつたことを想像する。褚遂良はその当時宰相であり、正常な状況であれば絶対にこんな多くの修正の筆画を残すはずはないと確信できる。

楊守敬が日本に来て漢唐の碑刻を紹介してから日本の書道界は碑刻に関する研究が盛んになってきた。楊守敬と直接交流のあつた日下部鳴鶴の弟子である比田井天来と、松田南溟は雁塔聖教序に対して深い研究を行っている。彼らは一本の拓本を残しており、そこから彼らの

研究の成果を垣間見ることが出来る。拓本の上には350箇所の赤い点と金の点が記されている。これは彼らが研究に値する箇所として印をつけたと思われる。1971年に書学院出版部から『書学院本・雁塔聖教序』が出版され、その赤と金の点を見ることができたが、残念なことに彼らの研究の成果は文章にして残されていない。

この研究を始めて、原石を見る必要性を実感した。原石の見学においては何度も試みたが、その夢がかなうことはなかった。しかし、1997年に、上海市人民对外友好協会の陳永興先生・陝西省人民对外友好協会・大雁塔文物保護管理所の協力の下、鉄格子をついにあけてもらい、原石に近づいて研究するという夢はかなうことができた。

この場で関係者に感謝の意を伝えたい。細かく原石を観察すると同時に、写真を撮る許可も得た。この何年間、私はその写真の整理に尽力を尽くしてきた。

写真撮りに成功した後、写真を拡大して研究に取り組み、全文1463文字の中から、978字に1492箇所の修正部分を発見した。その中の大部分を拓本から見つけ出すことは不可能であり、原石を現地で研究し続けたとしても、そこまで見つけることができるかは疑問である。拡大したからこそ真実の状況を発見することができたといえる。もちろん一番いいのは原石の前で、拡大鏡をもって、研究することであるが、大雁塔で一字一字に時間をかけることは許されることではない。日本に帰って、一字一字をA4の大きさにまで拡大し、

一つ一つの修正線を発見したときは大きな秘密を解き明かすような感覚だった。

褚遂良は永徽四年（653）のとき、尚書右僕射を務めており、長孫無忌に続く二番目の宰相であった。にもかかわらず、このような多くの不自然な現象を残している。当時の褚遂良がおかれた立場の状況を考えるととてもつらい気持ちになる。彼がもし宰相という正常な状況であればこのような多くの修正線をのこさず処理するチャンスはあったはずである。褚遂良の前後の経歴から彼の役職上の立場の変化を見ることが出来る。太宗が崩御して高宗が即位。褚遂良は顧命大臣に任命されたにもかかわらず、その次の年（永徽元年）に同州刺史へと左遷。永徽三年に長安に呼び戻された後、永徽六年には高宗と則天武后の結婚に反対したため二回目の左遷を受け、最後は愛州（現在のベトナム）で他界した。雁塔聖教序は褚遂良の一回目と二回目の左遷の間に建立されている。二回にわたる左遷の基本的な原因は高宗の褚遂良に対する排斥であると考えられる。しかし、雁塔聖教序を建立するために、高宗は褚遂良の筆が必要になったと思う。これが雁塔聖教序に修正線を出現させた背景である。

雁塔聖教序の原碑は大雁塔の両側の龕の中に埋め込まれている。保護の状態はほかの石碑に比べ良いといえるが、多くの摩滅や破損が存在している。高宗の諱を避けるために欠画された「治」の最後の一面は後の人によって書かれたことが線質の圧力のちがいによって写真の中から見える。写真を観察するときには原碑の写真が必ずしも唐のその当時と完全に一致するものではないことを十分注意をしなければならぬ。筆圧や実線か虚線かの理解が大切である。宋拓では石碑の下の部分が摩滅で字がよく見えないが、ここは風や雨に長年触れていた結果であると誤解されやすいところであり、よく見ると石碑の文字の下部の彫刻はそれほど摩滅していない。建碑のときからこの状態に近かったのではないかと予測する。写真を見る限り、石の面が平らでは

ない状況の中で確実に文字は彫られている。もしかすると石質の関係でこの部分は彫りにくかった箇所だったかもしれない。

この度中国の文物出版社から出版された「雁塔聖教序」は太宗の序と高宗の序記を二冊に分けた。序と序記の原碑はもともと別々に大雁塔の南門の東西の龕の中にあるので二冊に分けるのが一番合理的である。序の文章は右から左へ、序記は左から右へと大雁塔で石碑を見る場合には中央からそれぞれ西と東に向かって文章が進む特殊な形式になっている。そのことを考慮して原碑と同じ配列にしたのである。

写真の整理を通していくつかの問題点を発見した。小論ではその中の次の4つの問題について述べていく。一、雁塔聖教序の二碑の左右の位置関係について。二、褚遂良の第一回目の左遷について。三、どうして永徽四年に建立しているのか。四、修正線について。

雁塔聖教序は貞観二十二年（648）に文章が完成してから、永徽四年（653）の建立まで、複雑な時間が過ぎている。太宗から高宗への皇帝の変化、褚遂良の官位が高くなっていくのと前後して経験した二回の左遷。このようなことはすべて雁塔聖教序の現在の状況を作り上げるのに密接なかわりを持っている。永徽四年は太宗が皇帝のときより予定されていた行事があったにちがいない。この五年間のそれぞれの变化はこの二つの石碑に無数の修正線を作らなければならぬ状況を作り上げていたと思われる。

### 一、雁塔聖教序二碑の位置関係について

雁塔聖教序は太宗の撰した大唐三藏聖教序（略して「序」と高宗の撰した大唐三藏聖教序記（略して「序記」）より成り立っている。序記の最後に「伏見御製衆經論序、照古騰今、理含金石之声、文抱風雲之潤。治輒以輕塵足嶽、墜露添流。略拏大綱、以為斯記。」とあるように、高宗李治は太宗の序を見た後に序記を書いている。このこと

により、先に序、後に序記という絶対的な文章の順序が確定する。中国では古代より文章を右から左に書くことが習慣となっていた。だから多くの人が右に序、左に序記と思いついてしまった例もある。実際は、大雁塔の左右の龕に二つの石碑が左右対称に置かれており、さらには二つの文章の方向までも左右対称に進行されている。左龕に序があり、文章は右から左へ、右龕には序記があり、文章は常識に反して左から右へと進んでいる。これは雁塔聖教序だけに見られる特有のものである。

日本では『書道全集』を含む多くの著書が序と序記の位置を間違えて紹介している。その中でもっとも重要な人物は関野貞博士である。彼は1908年に中国西安を訪問しており、その後で『支那の建築と芸術』と『支那文化史蹟』の中で間違った説明をしている。これが「東に聖教序碑、西に聖教序記碑」という記載の一番古いものになる。関野貞氏のその当時の影響はとて大きかったことと、その年代は多くの人が自分の足で考察に向く機会の少なかつたことなども影響して、その後の著書は関野貞氏の記載を信じるほかに、間違いを繰り返していたと思われる。関野貞氏とほぼ同じ時代に西安に赴いている足立喜六氏は1933年に東洋文庫から出版された『長安史蹟の研究』に於いて正確な位置関係を示しているが、その当時関野貞氏に比べて影響力は足りなかつたようである。

現地調査を通して正確な左右の位置関係を確認し、『雁塔聖教序の位置関係についての一考察』を発表。その後この問題が建立の経緯と密接な関係にあることを発見し、『雁塔聖教序の建立の経緯について』を発表した。その経緯は簡単に示すと次のとおりである。

- 1、三蔵法師が印度から帰ってきて、太宗に序文の撰文を頼む。
- 2、太宗が序文を書いた後、皇太子李治が序記の文を書く。
- 3、弘福寺の寺主を中心とした長安の僧たちが石碑の建立を申請する。

4、中書令褚遂良は二つの序文を揮毫する。このときの字体は行書に近く、一枚の紙の上に右から左に、二つの文章は連続された状態で揮毫されている。

5、太宗が崩御し、高宗が即位する。

6、褚遂良が左遷され同州刺史となる。

7、褚遂良が同州から長安に戻り吏部尚書となり、その後尚書右僕射へと昇格する。

8、聖教序を再び揮毫。今回は二つの石碑に分けて揮毫であった。

序は右から左へ、序記は左から右へという形式である。しかし一回目の揮毫より良いものはできず、以前揮毫した原稿へ修正を加えることとなる。

9、石碑の建立。(蘭亭序の癸丑の同じ干支であり、蘭亭序が揮毫されて300年後の年である)

高宗が皇帝のときに石碑は立てられたので、序記はもともとの後に撰文されたにもかかわらず、そのときの皇帝という地位を考慮すると、序の後ろには置くことができなくなった。このときある人物が左右対称にする方法を考えたのだろう。この方法を誰が考えたのかは現在考察することはできないが、この考えは皇帝になったばかりの高宗のために考えられたものであることは確かである。慈恩寺は高宗が母親のために建立した寺であり、高宗は主人となる。ここで太宗と並列に並ぶことは、文章の順番から考えても比較的自然な状態といえるだろう。現在我々が雁塔で見ることのできる状態はこのように明らかに左右対称であるという現実のことである。大雁塔の南門の西の龕に序、東の龕に序記、すなわち左に太宗の序、右に高宗の序記。そして文章の方向は中央からそれぞれ西と東に向かっていて、序は右から左に、序記は左から右に流れている。序の題額は隷書であるのに対して、序記は篆書で揮毫されている。褚遂良の官名については

序が中書令で序記が尚書右僕射である。時間も一定ではなく、序は永徽四年歲次丑十月己卯朔十五日癸巳とあり、序記は永徽四年歲次癸丑十二月戊寅朔十日丁亥となっている。

この中には時間的な矛盾が存在する。褚遂良が中書令だったのは太宗在位のときであり、それは貞観二十二年九月己亥から左遷される永徽元年の十一月までのものである。しかも、尚書右僕射となるのは永徽四年九月甲戌(25日)から再び左遷される永徽六年九月庚午のあいだである。この碑が建立されたとき褚遂良は尚書右僕射であるにもかかわらず、一方には中書令と書き、一方には尚書右僕射と書かれている。この矛盾は左に太宗の序、右に高宗の序記という左右対称な関係を作ったという立場から見れば理解できる。中書令は太宗皇帝在任中の褚遂良が務めた官位で、太宗の序にはこれを用いるべきであるという考え方である。同時にこの中書令という記載は褚遂良が中書令のときにこの文章を揮毫したという可能性を秘めている。このことも我々が先に述べた修正以前の原稿の存在を証明するひとつの材料となっている。

## 二、褚遂良の一回目の左遷について

太宗が崩御する前、褚遂良と長孫無忌は高宗の顧命大臣に任命された。貞観二十三年六月一日、高宗は即位し、貞観の遺風と呼ばれている高宗の前期が始まった。高宗の前期は関隴集團カンロウを中心が発展してきた。名義上、関隴集團の二人の大臣が顧命大臣となり、政治的に高い位置に就いた。しかし、その中で関隴集團はもう先のない道を歩もうとしていた。早くも永徽元年にすでに関隴集團にとって不利なことが多々起こっている。

太宗が崩御して、後宮の嬪妃たちはお寺に入らなければならなかった。当時の武才人(則天武后)も感業寺に移っている。しばらくして、

高宗皇帝が寺で武才人を見、再び後宮に入れ、武昭儀とした<sup>3</sup>。そして、長男李弘は永徽二年に生まれている。このことはその約十ヶ月前の永徽元年の一年間のうちに高宗と武才人に関係があったことを意味している。顧命大臣の立場の二人はもちろんこの高宗と武才人の関係に同意することができなかった。武氏は太宗の才人であり、その子供である高宗がこのようなことをすることは道徳的にも反しているということもその理由のひとつである。

褚遂良が武氏との結婚に対して強烈に反対をしているのは、永徽六年の様子からよく見て取れる。永徽六年のことは両『唐書』や『資治通鑑』などの史書に詳しく情景が記されている。文献上からは永徽元年の対話は見ることができないが、永徽六年の対話から見ても褚遂良の反対の態度がずっと存在していたことがわかる。

長孫無忌は顧命大臣であると同時に、太宗の皇后長孫氏の兄であり、高宗から見ると伯父に当たる。彼の地位は安定したものであるはずだった。しかし、永徽元年の正月に洛陽の李弘泰という人物が長孫無忌の謀反を訴えて、皇帝の命により斬り殺されるといふ事件が起こる。『資治通鑑』のこの記載のすぐ後には長孫無忌と褚遂良は協力して政治を補佐し、皇帝も二人に礼儀を示し、聞き入れていることが述べられており、百姓(萬人)も平和に暮らせたことから永徽の政治のことは貞観の遺風と呼ばれていた。三人の関係が保たれており、皇帝も李弘泰をすばやく始末したと考えてよい。『旧唐書』によると李弘泰は術人である。于志寧はあまりにもでたらめな事実、李弘泰をすぐ殺すべきだという判断をしている。その結果がどうであれ、このような事件が起こってしまったのは現実のことである。このことは長孫無忌の権威に対して、他人の挑戦を受け始めていることを証明している。高宗が皇帝になったのは22歳のとき。太宗に比べるとその重圧感の差は大きく、統治の能力もある程度低下していたであろう。当時の高宗と顧命大臣である長孫無忌と褚遂良の三人は今こそ団結して国を

治めることに力を入れないといけない時期だった。褚遂良はかつて李治が皇太子になるために多大な努力をしている。つまり褚遂良のおかげで高宗は皇帝になれたといっても過言ではない。高宗は褚遂良に感謝しなければいけない関係だった。しかし、高宗は幼いころから気が弱い性格であったため、もしかすると皇帝になることなど考えたこともなかったと思われる。高宗は太宗の第九子で普通であれば皇帝になることはない。もともと皇帝とは関係のなかった李治は急に皇太子の位を手にした。想像できることは嬉しい反面どこか戸惑っていたことである。皇帝になった後、彼は太宗がどのように天子を全うしたかを自分の目で見ているので、天下を自分の手で治めることを頭に描いていたはずである。ところが太宗とあまり年の違わない褚遂良は顧命大臣として、李治を徹底的に教育し補佐することを決心していたため、褚遂良の高宗に対する諫めの言葉も日に日に増えていったのではないだろうか。高宗はこういった圧力を感じ始めていく。高宗はこのようにして褚遂良を嫌いになっていったに違いない。高宗も顧命大臣は必要ないと思いついた時期である。しかし、大きな太宗の残した影が簡単には二人を突き放せない状況を作っていた。褚遂良の第一回目の左遷はまさしくこのような状況の中で発生している。両『唐書』の褚遂良伝と高宗本紀には褚遂良が左遷されて同州刺史になったことだけが記されている。たとえば『旧唐書』卷80褚遂良伝には「永徽元年、進封郡公。尋坐事出為同州刺史。」とある。このようにその理由が書かれていないため、今日褚遂良を紹介している書物の多くはこの問題を指摘していない。実際はこの永徽元年の闘争はとても重要で、特に関隴集団の終結を議論するとき、永徽六年の廃王立武の闘争だけでは考えることはできない。関隴集団がこの時点でもうすでに最後の段階に突入していて、高宗の二人の顧命大臣に対する微妙な感覚が関隴集団を終結する方向へと導くのであった。

実は、両『唐書』の韋思謙伝と『唐会要』さらに『資治通鑑』には

|                |   |
|----------------|---|
| 『旧唐書』<br>韋思謙伝  | 時中書令褚遂良賤市中書詔語人地、思謙奏劾其事、遂良左授同州刺史。及遂良復用、思謙不得進、出為清水令。 <sup>10</sup>  |
| 『新唐書』<br>韋思謙伝  | 中書令褚遂良市地不如直、思謙劾之、罷為同州刺史。及復相、出思謙清水令。 <sup>11</sup>   |
| 『資治通鑑』<br>卷一九九 | (永徽元年)冬十月。己未、監察御史陽武韋思謙劾奏中書令褚遂良抑買中書詔語人地。大理少卿張叡冊以為准估無罪。思謙奏曰：『估價之設、備國家所須、臣下交易、豈得准估為定！叡冊舞文、附下罔上、罪當誅。』是日、左遷遂良為同州刺史、叡冊循州刺史。思謙名仁約、以字行。 <sup>12</sup>             |
| 『唐会要』<br>卷六一   | 永徽元年十月二十四日、中書令褚遂良抑買中書詔語人史訶擔宅、監察御史韋仁約劾之。大理丞張山壽斷、以遂良當徵銅二十斤。少卿張叡冊卿以為非當、估宜從輕。仁約奏曰『官市依估、私但兩和耳。園宅及田、不在市肆、豈用依估。叡冊曲憑估買、斷為無罪。大理之職、豈可使斯人處之。』遂遷遂良及叡冊官。 <sup>14</sup> |

褚遂良が左遷された直接の理由が記されている。

史訶擔とは史訶耽のことであり、近年彼の墓が固原から出土しており、『固原南郊隋唐墓地』という本で詳しく紹介されている。墓誌より彼の生い立ちを知ることができる。その墓誌銘によると彼は史国国王の末裔で、原州平高県の人であり、次のように史訶耽の経歴を説明している。

武徳九年、以公明敏六閑、別敕授左二監。奏課連最、簡在屢聞。尋奉敕直中書省翻訳朝会、祿賜一同京職。貞観三年、加授

宣徳郎。七年、又加授朝請郎。九年、又加授通義郎。十三年、又加授朝議郎。十九年、丁母憂。集蓼崩魂、匪我纏痛。同子羔之泣血、類叔山之荒毀。永徽四年、有詔：朝義郎史訶耽、久直中書、勤勞可錄、可游擊將軍、直中書省翻譯如故。名參省禁卅餘年、寒暑不易。其勤終始弥彰、其恪属日月休明、天地貞觀。爰及升中告禪、於是更錫崇班、是用超遷、出臨方岳。乾封元年、除虢州諸軍事、虢州刺史。<sup>15</sup>

唐代の中国と西域の交流は盛んになっており、中書省では四方からの朝貢や表疏などを扱うので、訳語人という現在でいう通訳がいた。<sup>16</sup>以上の記載から史訶耽は確かに中書省で働いていることがわかり、褚遂良の下で通訳をしていた。墓誌によれば、永徽元年に褚遂良が左遷されたとき史訶耽は別に何の影響も受けていない。

褚遂良の値を抑えて買った土地は現在のところ確定することはできないが、尚書右僕射河南郡公褚遂良が実際任んでいた家は長安城の平康坊の西門の南にある。褚遂良の父である太常卿の褚亮とそこに住んでいた。<sup>17</sup>『隋唐嘉話』の故事には平康坊の同じ家で褚亮と褚遂良は別々に門を構えていたことを記している。<sup>18</sup>

褚遂良は小さいころから父と生活を共にしている。父に随って隴右にいたとき、薛挙が国号を作ると、その通事舎人となり、その薛挙が敗れた後、唐においては秦州都督鎧曹參軍を授かっている。<sup>19</sup>褚亮が他界する貞観二十一年まで彼ら親子は一緒に生活していた。『褚亮伝』の最後の場面は次のように太宗から大事にされている。

太宗幸遼東、亮子遂良為黃門侍郎、詔遂良謂亮曰：『昔年師旅、卿常入幕；今茲遐伐、君已懸車。倏忽之間、移三十載、眷言疇昔、我勞如何！今將遂良東行、想公於朕、不惜一兒於膝下耳、故遣陳離意、善居加食。』亮奉表陳謝。及寢疾、詔遣醫藥救療、中使候問不絕。卒時年八十八。太宗甚悼惜之、不視朝一日、贈太常卿、陪葬昭陵、諡曰康。<sup>20</sup>

褚亮が他界したとき太宗は落胆し、一日朝廷に出てこなかったほどである。

褚遂良の一生で父褚亮の影響はとても大きかった。褚家の長はずつと褚亮だったのに加えて、太宗の行動からもわかるように褚亮は太宗にとつても大事な存在だったようである。もしも褚亮がいなかったら、褚遂良の存在もなかった。褚遂良もこの点は理解していただろう。褚遂良は褚亮が他界して、中書令に昇進し、高宗の顧命大臣になったところで、ある意味自分だけに頼って生きる生活がスタートした。褚遂良は高宗も自分と同じ境遇であると思っていたのではないだろうか。そんなことから褚遂良の高宗に対する感情は深まっていき、もしかしたらこの深い感情が高宗の褚遂良に対する不満を引き起こしてしまったのかもしれない。

『大唐新語』にも次のような記載がある。「韋仁約彈右僕射褚遂良、出為同州刺史。遂良復職、黜仁約為清水令。<sup>21</sup>」この本の作者は唐の元和年間に劉肅である。厳密にいえばそのときの褚遂良の官位は中書令だが後の右僕射と書いている。ここで大事なのは韋思謙の清廉を確実に伝えているというところにある。

もしも高宗が二人の大臣を重要視していれば、褚遂良の左遷問題は高宗が保護できたにちがいない。褚遂良の第一回目の左遷は高宗の褚遂良に対する不支持が生んだといっても過言ではない。高宗からしてみればこの事件を褚遂良左遷の口実として利用したのである。

永徽元年、褚遂良は同州刺史へと左遷された。現在のところ文献上で、褚遂良が同州でどのように過ごしたのかはわからない。<sup>22</sup>同州とは現在の陝西省大荔県である。

### 三、どうして永徽四年に建立したのか

褚遂良が一年余り務めた同州刺史から再び中央の政治の舞台に戻

る。永徽三年には吏部尚書に、永徽四年には尚書右僕射へと昇格していく。その後永徽六年に王皇后を廃して武氏を皇后に立てる廢王立武の闘争のために左遷されてしまう。単純に時間の角度から見ると、この期間に雁塔聖教序は完成されている。そしてこの作品は褚遂良のもつとも代表的な石碑として、後世に残っていくのである。

石碑の落款から見ると雁塔聖教序は永徽四年の十月と十二月に建立されている。ここで褚遂良がいつ本文を揮毫したかが重要な問題になってくる。文章自体は貞観二十二年八月に太宗と皇太子李治により撰文されている。褚遂良は貞観二十一年に父を亡くし喪に付した後、二十二年二月に復帰している。よって文章が完成したときの褚遂良の官位は黃門侍郎だった。そしてその翌月、中書令に昇進している。虞世南が他界した後、褚遂良は魏徵の推薦により、宮廷の大書家となっていた。その三年後、歐陽詢が他界すると、褚遂良と比べるだけの實力を持った書家が存在しないという状況が生まれたことになる。太宗の思いの中には雁塔聖教序は褚遂良に書いてもらおうという考え方が生じたのかもしれない。太宗の好んだ蘭亭序は永和九年(353)の癸丑の年に揮毫されており、癸丑の年は記念すべき年となる。このときもすぐ訪れる癸丑の年はちょうど永和九年から三百年後の仮定上の貞観二十七年(653)である。ここで注目したいのは唐の人たちがどのような記念の年を過ぎていたかということである。ここではその癸丑の年そのものに対しての意識を見てみたい。

『西溪叢語』には次のようなことが記されている。

東坡『和陶』詩云『再游蘭亭、默數永和。』考蘭亭之會、自右軍、謝安、凡四十二人。後、大曆中、朱迪、呂渭、吳筠、章八元等三十八人、經蘭亭故池聯句有『賞是文辭會、歡同癸丑年』之句、必有此事也。<sup>24</sup>

この文献からは癸丑の年である大曆八年(773)に朱迪、呂渭、吳筠、章八元など三十七名が蘭亭にて王羲之の蘭亭序を記念して詩会

を開いている。「賞是文辭會、歡同癸丑年」とあるように唐の人にとってこの一年は記念するに値する歳だったにちがいない。彼らが癸丑の年に遭遇すること自体重要なこと。このことから考えても太宗と褚遂良たち大臣が蘭亭序について繰り返し討論しているうちにこの癸丑の年に抱いた感情はさらに高まっていったに違いない。きつと次にやってくる癸丑の年をどういう風に過ごすか考えたのだろう。

雁塔聖教序が癸丑の年に建てられたのは偶然のことではないと考えている。わざわざ蘭亭序の記念の歳にあわせたのである。貞観二十二年、「弘福寺の寺主円定及び京城の僧たちは二序文を金石に刻し、寺に蔵することを申請し、太宗はそれを許可している」<sup>25</sup>。このことから浮かび上がってくるのは後に弘福寺の懷仁が王羲之の書を集めて作った集字聖教序なのだが、よくこの箇所を見ると、申請して許可を得たときに王羲之の書で石碑をつくるとは一言も言っていない。しかも弘福寺が建てたかっただけでなく京城の僧たちの願望だった。よって、貞観年間に褚遂良が聖教序を揮毫した可能性は非常に高いといえる。残念なことは太宗がその二年後に崩御したことである。そして時代は永徽に入り、褚遂良は同州刺史へと左遷されることによって、円定の申請した建碑のことはしばらくそのままになってしまった。褚遂良が同州から長安に戻り、癸丑の年の前年の永徽三年正月己巳に吏部尚書並びに同中書門下三品となり、聖教序の建碑に向けて大事な一歩を歩みだすことになる。その次の年、九月甲戌に褚遂良は尚書右僕射、同中書門下三品となり、<sup>27</sup>このようにして建碑に一番適した時間がやってきた。

二序文はもともと先に序があり、後に序記という関係であるから褚遂良が貞観年間にこの文を揮毫していたとすれば当然のように先に太宗の文を書き、続けて高宗の文を書いたはずである。永徽年間に入り、唐の皇帝は高宗に変わってしまった。皇帝とは常に天下で一番の存在にあるべきで、高宗が二番目の地位にあるというのを避けるため

に中央からそれぞれ左右に文章を流し、どちらかが上位であると理解できるように左右対称の一对の石碑が出来上がったと推理する。

この調整の過程の中で、褚遂良は大変な苦悩にあっている。第一回目の揮毫のとき、まだ正式に石碑を建立する準備はできていなかったこともあるが、行書の風格で書きこんでいたにちがいない。その後、同州に左遷され、戻ってきたとき、高宗が褚遂良に石碑の建立の準備をさせた。石碑の建立のために長安に戻された褚遂良の気分はなかなか晴れるものではなかっただろう。なんらかの理由により楷書へと変更し、何回揮毫しても以前のようにうまくいかないのです、最後は以前の原稿を使わなければならないようになり、それに修正を加えたとする。そこで修正の痕跡が出現したのである。修正の一番の特徴は行書的表現を楷書の筆画へ修正したものと見られる。

ここで最大の問題点はどうして修正した後にかかわらず原稿の元の線を書き残しているのかということ。普通であれば修正や補筆をした後完成した最後の姿からは修正や補筆の痕跡を残さないものである。もし残っていればそれはあまりよいものではない。褚遂良の書はとても高いレベルにあり、もし正常であればこのようなことにはならなかったに違いない。このことから正常でない何かの事情があったのだと考えるのが適当であり、この修正線自体が何かを物語っているのにちがいない。

#### 四、修正線について

比田井天来<sup>28</sup>と松田南溟は『書学院本・雁塔聖教序』<sup>29</sup>を残した。この拓本にはあわせて350個の金と赤の点が打たれている。比田井天来の子供である南谷氏はそのあとがきにて、この点に関しては惜しいことになにも聞いていないと書いており、これまで一つの謎となっていた。

この拓本に出会ってからこの問題について長年考えてきた。1997年について西安の大雁塔で原碑の写真を撮ることに成功し、拡大した写真を使って雁塔聖教序の細部にわたる問題を研究することを始めた。その結果は1999年筑波大学で行われた第九回書道史学会において『雁塔聖教序の線に関する考察』<sup>31</sup>を発表し、2002年には『雁塔聖教序の不思議な刻線を探る』<sup>32</sup>を発表した。普通だったら修正した後、もともとの線は消されるのだが、この石碑に於いては修正線と原稿の元の線が両方残っているために、今日我々はこの線を修正線として判断している。ここでは私たちが見たその結果を紹介する。

序碑の821字の中に566文字、860箇所<sup>33</sup>の修正があり、序記碑の642字の中には412文字、632箇所<sup>33</sup>の修正があった。研究をする過程で、修正部分を10倍拡大してやっと思つて見つけることができた箇所もたくさんある。大正の時代に、天来・南溟の両書家は原寸大の拓本という状況でこんなにもたくさん疑問を見つけており、それは尊敬に値する。拓本と写真を比べるとすぐわかることだが、写真の中でははつきり映っているも拓本では見えない部分がたくさんある。もしこれから現地に行つて雁塔聖教序を自分の目で見たとしても一字一字拡大しない限りこの統計結果のような数字は出ないだろう。

『雁塔聖教序の線に関する考察』<sup>34</sup>の本の中では修正の特徴を分類して紹介した。その中で最も重要な問題点は行書の表現を楷書的表現へと修正した統一的理念にある。もちろんすべての現象がこの方法ではないが、比較的大きな割合を占めている。線の前後や上下にある点や短い線、さらに転折部分に加えられた点画などは行書から楷書へ移行する表現を表している。

写真によりわかったことは行書的表現から楷書的表現への修正である。このことは褚遂良がこの石碑を完成させるまでの過程を明白に伝えている。



1、まず行書的表現で揮毫した。  
 2、次に同州刺史へと左遷され、この作業から少し時間が空いてしまう。  
 3、そして最後に長安に帰ってきて、もう一度揮毫するが以前のものを超越することはできず、以前に揮毫した作品を底本として修正を加えていった。  
 紙面の制限もあり、ここでは何枚かの写真を拡大しているので、読者の皆様が観賞されることを望んでいる。

注

- 1 荒金信治「雁塔聖教序の位置関係における一考察」(『別府大学国語国文学』第33号、1991年)。
- 2 荒金信治「雁塔聖教序建立の経緯」(『別府大学紀要』第34号、1993年)。中国語は『98法門寺唐文化国際学術討論会論文集』(陝西人民出版社、2000年)96～100頁掲載。
- 3 『旧唐書』卷六、則天皇后本紀(中華書局、1975年)115頁。
- 4 『旧唐書』卷四、高宗本紀によると李弘が他界したのは上元二年(675)四月己亥日。また、『新唐書』卷八一、孝敬皇帝伝によると弘は24歳で死んでいるので、この史料から計算すると李弘が生まれたのは永徽二年となる。
- 5 『資治通鑑』卷一九九(中華書局、1956年)6289～6290頁。
- 6 『資治通鑑』卷一九九、6270～6271頁。
- 7 『旧唐書』卷九一、桓彦範伝、2927頁。
- 8 『旧唐書』卷七八、于志寧伝、2698頁。
- 9 『旧唐書』卷八〇、褚遂良伝、2738頁。その他の記載は下記の通りです。
- 10 『旧唐書』卷八八、韋思謙伝、2861頁。
- 11 『新唐書』卷一六、韋思謙伝、4228頁。
- 12 吳玉貴の『資治通鑑疑年録』(中国社会科学出版社、1994年)206頁によると、この月には己未は無く、『資治通鑑』の『己未』の上には『十一月』とあるべきとあり、これは十一月の出来事である。
- 13 『資治通鑑』卷一九九、6272～6273頁。
- 14 『唐会要』卷六一、御史台中、彈劾(上海古籍出版社、2006年)1257頁。
- 15 『大唐故史公墓誌之銘』、羅丰『固原南郊隋唐墓地』(文物出版社、1996年)68～70頁。
- 16 『資治通鑑』卷一九九、6273頁、胡三省注:「中書掌受四方朝貢及通表疏、故有詛語人」。
- 17 『長安志』卷八、平康坊、『宋元方志叢刊』第一冊(中華書局、1990年)114頁:「西門之南、尚書左僕射河南郡公褚遂良宅。自遂良父太常卿亮居焉。」尚書左僕射は尚書右僕射の誤り。
- 18 『隋唐嘉話』卷中(中華書局、1961年)27頁:「褚遂良貴顯、其父亮尚在、乃別開門。勅嘗有以賜遂良、使者由正門而入、亮出口『渠自有門』」。
- 19 『旧唐書』卷八〇、褚遂良伝、2729頁。
- 20 『旧唐書』卷七二、褚亮伝、2582頁。

21 『大唐新語』卷二、剛正第四（中華書局、1984年）29頁。  
 22 郁賢皓『唐刺史考全編』卷四、同州（安徽大学出版社、2000年）110頁に褚遂良が同州刺史となった文献が紹介されているが、『冊府元龜』、『大唐新語』、『資治通鑑』と両『唐書』以外は『全唐文』卷一四九の褚遂良「故漢太史司馬公侍妾随清娛墓誌銘」の中に「永徽二年九月、余判同州。」とあるだけである。

23 『新唐書』卷六一、宰相表上、1637頁。

24 『西溪叢語』卷上、蘭亭会（中華書局、1993年）33頁。

25 『大慈恩寺三藏法師伝』卷七（中華書局、1983年）148頁：「時弘福寺寺主円定及京城僧等、請鑄二序文於金石、藏之寺宇、帝可之。」

26 『新唐書』卷六一、宰相表上、1638頁。

27 同上、1639頁。『新唐書』卷六一、宰相表では『尚書右僕射』を『尚書左僕射』と間違っている。

28 比田井天来（1872～1939）は日本の現代書道の父と呼ばれている。1880年に楊守敬が大使日本大臣の黎庶昌の随行員として来日し、書家日下部鳴鶴と友好関係を持った。謝承仁主編の『楊守敬集』第一卷（湖北人民出版社、1988年）3頁には「楊守敬の書法は日本に大きな影響を与えている。日本の大書法家の日下部東作は謙虚な気持ちで教えを請い、二人は切磋琢磨し、師弟の交わりを結んだ。現在においても日本の書道界では楊守敬の書法を研究し、提唱している。」と紹介されている。比田井天来は日下部鳴鶴の弟子であり、彼らの影響の下に古代の書の研究を重ねている。

29 『書学院本・雁塔聖教序』（書学院出版部、1971年）発行者は比田井南谷。

30 同上、あとがき。

31 荒金大琳「雁塔聖教序の線に関する考察」（『第11回別府大学書道

部 書道選抜展」、1999年）。

32 荒金大琳『雁塔聖教序の不思議な刻線を探る』（『墨』第157号、2002年）43～47頁。

33 修正文字と修正箇所数の関係表。例えば一文字の中に二箇所修正がある場合は『修正2』となります。

序 碑（全部で821字、修正の有る文字は566文字、修正の無い文字は255文字）

| 修正箇所 | 修正文字 | 修正1 | 修正2 | 修正3 | 修正4 | 修正5 | 小計  |
|------|------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 347  | 347  | 314 | 157 | 51  | 9   | 2   | 860 |
|      |      | 153 | 51  | 36  | 9   | 2   | 566 |
|      |      | 10  | 2   |     |     |     |     |
|      |      |     |     |     |     |     | 860 |
|      |      |     |     |     |     |     | 566 |
|      |      |     |     |     |     |     | 小計  |

序記碑（全部で642字、修正の有る文字は412文字、修正の無い文字は230文字）

| 修正箇所 | 修正文字 | 修正1 | 修正2 | 修正3 | 修正4 | 修正5 | 小計  |
|------|------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 251  | 251  | 236 | 118 | 29  | 12  | 2   | 632 |
|      |      | 87  | 29  | 48  | 12  | 2   | 412 |
|      |      | 10  | 2   |     |     |     |     |
|      |      |     |     |     |     |     | 632 |
|      |      |     |     |     |     |     | 412 |
|      |      |     |     |     |     |     | 小計  |

※現在は更に修正箇所を確認中である。

34 荒金大琳『雁塔聖教序に関する記録』（啓照SHO出版部、2003年）。

※文中の文物出版社出版物は、荒金大琳・荒金治整理『唐褚遂良書雁塔聖教序』、2007年9月

拡大写真

※拓本は東京国立博物館提供。



つけ加えられている部分は  
のまじりにしたかたのみか



金1

修正3 172

どちらが後から書いた修正線だったのだろうか？



金1



152 修正2

同じ入筆より引かれていく二重線



終筆の筆意の方向は異なっている

152



237 修正4



赤2



